

(1) 霊夢懐胎

日蓮聖人の伝記は古今にわたって二百種以上もありますが、画伝では聖人滅後二百年余り後の室町時代に出た「註画讃」が最初のもので、江戸時代には数々の画伝が出ており、また別に有名な広重や国芳そのほか当代一流の画師の筆になる版画が版行されていて、それらは今では非常に珍重されています。

一般に伝記には確かな材料に拠る研究的な史実を説いたものと、口碑や俗説をまじえた伝説をとり入れたものとの二通りに大別することができます。

そして、口碑や伝説は時代が降るにつれて大きく粉飾されてゆく傾きがあります。

聖人ご自身の書きのこされたものには、家系や懐胎の時の夢物語や誕生の奇瑞のことなどはありませんが、註画讃などには、父は遠江の国主、貫名重実の次男重忠といい、聖武天皇の末孫で、母は清原氏の娘で梅菊と云ったと伝えています。

平安末期から鎌倉初期のわが国の内乱や世相はここに改めて言うまでもないところですが、聖人が胎内に宿られた承久三年（一二二一）には「承久の変」があり、その結果、後鳥羽・土御門・順徳の三上皇が、それぞれ隠岐・阿波・佐渡の島々へ流されるという一大不祥事件がおこりました。

日輪が蓮華に乗って母の懐に入った夢を見て聖人を妊んだということは、世相の闇を照すという寓意と、日蓮という名に因んでの吉兆としたものと考えられます。しかしまた毎朝昇る日天をおがみ念誦された母が、霊夢を感じられたことはありえたことでもありましょう。

(2) 誕生瑞祥

貞応元年（一二二二）二月十六日に日蓮聖人は安房国（千葉県安房郡）小湊に誕生されました。

仏教には末法という時代思想があります。そして「時」と「教法」とが相互に深い関係があると教えられています。

その末法という時代はいつからであり、その時の教法はどのような教えが行われなければならないのかということが大切なことなのです。

末法の時になると乱世になり、人心が悪くなる。だから末法には、重病人には特効薬を服まさないといけないのと同じように、最も勝れた教えでなければ衆生を教化することはできないというのが仏説です。

わが国では古くから平安末期の永承七年（一〇五二）を末法の初年として算定しています。

それによると聖人の誕生は末法に入って百七十一年目に当たります。

聖人はご自身が仏の使いであるという使命を痛感されたのは、末法に経王の法華経を弘めることの重大な任務を思われたからです。

末法万年の暗を照らす仏の御使、法華経の行者の誕生に蓮花が時ならずして花を開き、にわかには清泉の湧き出るといふ瑞祥は別段に不思議ではないともいえましょう。

伝記には聖人誕生の朝、小湊の浦に白蓮花が開いて里人を驚かし、産室の庭に清水が湧き出したと言ひ、聖人産湯の水はこの清泉を汲んで用いたと伝えられています。かくて聖人は末法の初めに、安房の漁村の民家に生を受け、幼名を善日麿と名づけられました。

(3) 出家得度

善日麿は数え年十二のときに、両親の膝もと離れて清澄山に登り、寺主道善房について出家し、学問修行の生活に入ることになりました。

清澄山は安房天津の北峰の名刹で、この寺の像起によると奈良時代の末、宝亀三年（七七一）に不思議法師がここに来て、山中の柏の木で虚空蔵菩薩像を作って寺を開いたのが始まりで、その後しばらく衰微していたのを承和3年（八三六）慈覚大師が此所を道場として中興した山であると伝えられ、鎌倉時代には天台慈覚の流れを汲む寺でありました。

少年善日麿は清澄に登って名を薬玉丸と改められました。

その出家の動機は両親の囑望とか偶然の機縁によってした他動的なものではありませんでした。

少年の胸にわだかまる、解こうとして解き切れない疑問をただしたいための自ら進んでもとめた意志的な出家であったのです。

このことは、晩年聖人の消息にたびたび述べられているところによってうかがい知ることができますその薬玉丸の懐いた大きな疑いとは何であったか。

それは国家社会におこった事件に対する疑いと、人心を導く教え、すなわち仏法についての疑いによるものです。

遠くは寿永の乱に幼帝の悲運があり、近くは上皇遠流の承久の乱があったが、このような名分の乱れは何によって起ったのであろうか。国を治める法は正しく行われているのであろうか。

仏法は八宗十宗とあるがそれは何故なのか、仏の真意はどこにあろうか。という二つの疑問の解決を志しての出家であったのです。

純情で聡明な少年薬玉丸は学問勉強に専念すること四年、この間に人目も尋ねたが疑問は解決されぬままに、道善房を導師として剃髪得度の式が挙げられました。

(4) 虚空蔵菩薩の靈験

身に余る大きな疑問を懐いて出家した薬玉丸は、その解決の緒をもとめ、寝食をわすれて、法門の学問に没頭されました。

清澄寺には、政子寄進の一切経があり、ほかに単行の典籍も少なくなかったようですが、

仏典を読んで仏の真意を知ることが凡智をもってしては、なかなか及びがたいところです。仏典は数多く、仏説は多岐です。一切経を正しく見、批判するには秀れた智者でなければかなわぬことです。

入山直後の少年薬玉丸は、思いをここによせて、「日本第一の智者となしたまえ」との大願をおこし、その願いを、智慧を授ける本尊として知られている清澄寺の虚空蔵菩薩にむかって、熱心な祈願をはじめました。祈願の日数については諸伝まちまちで、三七日とも百日とも、あるいは数日ともあってはつきりしませんが、虚空蔵菩薩に智慧を祈られたことは、聖人自ら述懐されているところで、かくれのない事実です。熱心な祈願は智慧の宝珠を受けるといふ靈験となってあらわれました。

み堂の前で祈願をこめるうち、夢うつつのうちに虚空蔵菩薩から、明星のような智慧の宝珠を授けられ、このことがあってから、経論を見る眼は格段にさえて、各宗の大綱をほぼ伺うことができたと書き記されています。

伝えるところによると、薬玉丸はその時意識を失って階段のかたわらに卒倒し、血を吐いて、あたりの笹を血に染めたといひ、「凡血の笹」とよばれているのがその名残であるということです。

「ただ法門をもって邪正をただすべし、利根と通力とにはよるべからず」とも、「智者にわが義、破られずは用いじ」とも言われて、法門と経釈に依って正法、法華経を宣揚された聖人は、まことに日本第一の智者でもあられたのです。

(5) 叡山遊学

薬玉丸は出家してその名を是生房蓮長と改めましたか、その頃には仏教初歩の常識をわきまえ、世間の学問にもひととおりの見解を持つまでに成長されました。

しかし、日本第一の智者となるには清澄山での勉強でこと足りるはずはなく、学問の中心地に出て一層の勉強をはげむことになりました。

蓮長の最初の遊学の地は鎌倉で、ここでは法然系の浄土と栄西の臨済禅を究め、次いで叡山に遊学されることになりました。

比叡山は仏教の最高学府で、日本仏教は叡山を母胎として発生したものです。

比叡山にはひとくちに三千の学侶と言われる大勢の学僧がいました。

蓮長は二十二歳の寛元元年（一二四三）郷里を離れて遠く叡山に登って研学の功を積むことになりました。蓮長はここで有名な学僧、大和庄俊範について学び、東塔無動寺ヶ谷の円頓房の主となり、後には横川の華光房を兼ねたと伝えられています。

華光房というのは今の定光院の前名で、今も定光院は聖人の遺跡として知られているところです。

「十二・十六の年より三十二に至るまで二十余年が間、鎌倉・京・叡山・園城寺・高野・天王寺等の国々寺々あらあら習い回り」と述懐されているように、青年僧蓮長は二十二歳

から三十二歳の春まで比叡山を中心として京の東寺や仁和寺やその他の諸寺を訪ね、高野山、大防の天王寺、三井の園城寺さらには奈良にも出かけて仏の真意、仏教の実義を求め、顕密 諸宗の教を学ばれました。

聖人の教は青年期の心魂を打ち込んだ、深い学問的研鑽の上に打ち立てられていることを忘れてはなりません。

(6) 開宗宣言

建長五年（一二五三）四月二十八日は立教開宗の日であります。この日、聖人は清澄山の一角、旭の森に立って立ち昇る太陽に向って南無妙法蓮華經の題目を唱えて開宗を宣言したと伝えられています。

青年僧蓮長が精魂を尽して仏教を習い究めたのは、仏のまことの教を知るためであり、それによって宗教としての信仰を確立するためでした。

二十余年間にわたる勉強求道の結果は教法としての法華經歸一の信仰を確立されました。回顧してみると、法華經を依經とする天台宗があり、ほかにも法華經を讀誦する教団はあるが、信仰対象の本尊、行儀形式ともに法華經に徹した宗団はすでになく、形式的にあるものは何れも雑乱し、本末を忘れた信仰でありました。肝心の天台宗は慈覚・智証・恵心等の後人によって乱脈におちいり、叡山も真言密教の山となりはてて、天台・伝教の真意からは遠く離れてしまっていることを蓮長は慨嘆せずにはいられませんでした。

そして、教法を思い、時を考え、自己を省みて如何にして法華經歸一の信仰を宣言すべきかを深く思いなやまれました。蓮長は遂に決意した。

それは仏の使いとしての自覚に立って、衆生を救い、仏国土建設のために法華經弘道に一身を捧げるといふ、大慈悲心から出た決意でありました。これを言えば身に迫害のふり来ることはもとより覚悟の上のことでした。

旭の森の唱題開宗のことは偽書と言われる本門宗要抄に出るところで、確かな遺文には見えないようです。

しかし大自然の中に立って暗黒を打破って晃々と立昇る太陽に対して題目を唱えて開宗を宣言することは聖人の意気を表象するにふさわしい筋書のようにもおもわれます。

(7) 持仏堂説法

法華經への純一の信心に生き、それを身心に実行することが、仏の御心に叶うことであり、世のため人のためであるという堅い信念に立たれた聖人は、身命を惜しまず、唱導の先達にならんと決意せられました。

そして初めてこの法門を申し開かれたのが建長五年四月二十八日のお昼ごろのことです。弘安二年十月。聖人五十八歳のとき書きおこられた「聖人御難事」という御書（この御真

筆本が、現在、千葉県中山の聖教殿にあります。)の冒頭に、次のように書かれてあります。

去る建長五年四月二十八日に安房国長狭郡の内、東条の郷、今は郡なり。

天照大神の御くりや、右大将家の立て始め給いし日本第二のみくりや、今は日本第一なり。此郡の内清澄寺と申す寺の諸仏坊の持仏堂の南面にして、午の時に此法門、申しはじめて今に二十七年

また別に、清澄寺の大衆へ送った御書にも、この日、道善房の持仏堂の南面にして浄円房並びに少々の大衆に申し始めたを書いて居られます。

仏は釈迦仏、経法は法華経がわれらの皈依すべきところであり、それ以外の仏やお経は枝葉である。

根本を忘れて末節についてはならぬという趣旨の説法は聴く人の耳には素直に入らなかったばかりか、反感をかい地頭の東条景信はこれを聞いて殺意をいただいたと云われています。

(8) 故山追放

地頭景信の聖人に対する怒りは、ひととおりではなく、聖人を殺そうと計画しているという風評が立ちました。これを聞いては、師匠の道善房も致し方なく、その夜、夜陰にまぎれて、浄顕・義浄の二人の旧友に案内させて、道なき道を辿って間道づたいに清澄山から聖人を追放したと伝えられています。

年老いた師匠に仕へることもできず、懐かしい旧友に分れ、思い出多い故山の一樹一石もこれが見おさめとなり、霊験を授けられた虚空蔵菩薩に報恩の読経を捧げる暇のなかったことは心残りであったでしょうが、聖人の使命は大きく、此処でためらうことが許されませんでした。

教法に身を捧げる決意を固められた聖人も、人情を思うて人知れず涙を流されたことでありましょう。

しかし、法華経を末法の人々に伝えることは並大抵のことでは出来ないことです。

法華経には、この経は「如来の現在にすら、怨嫉多し、況や、仏滅度の後においては猶更のことである。」と説かれてあります。また法華経に、この経を弘める人には「三類の強敵」が現れるとあります。

これはまた三類の増上慢とも言われる人達で、増上慢とは覚っていないのに証覚を得ていると思こんでいる人のことで、三類とは「俗衆」といって在俗の人たちと「道門」という、出家した人たちと、[僭聖]といつて聖者のように見せかけてはいるが、内心邪悪の人たちのことで、この三類の強敵が正法を弘めるときには必ず邪魔立てをするということが説かれてあります。

聖人にとっては覚悟の上とはいえ、清澄追放は三類の強敵の中、俗衆増上慢の出現による開宗初頭の受難であったのです。

(9) 父母受戒

清澄山を追われた聖人は、山を下りて、西条の花房村にゆき、阿弥陀堂の開堂供養に一座の説法を請われたと伝えられています。

開宗を宴言した聖人にとって、何よりも気にかかることは両親のことでありました。仏教では四恩の第一に、父母の恩をあげていますが、特に聖人は孝養の念の厚かったことは、書きのこされた文書の随所に見えており、また晩年、身延隠棲後も父母追恩のこまやかな心情がたえられています。得度の地を追われ、故郷を去るにあたって、子として父母への挨拶を述べ、恩を棄てて無為の世界に入ったものとして、後生の導きを果して孝養に報いるために、聖人は小湊に両親を訪ねました。

清澄追放のことを聞いていた父母の心配はひととおりではありませんでした。

しかし、今、親子相對して話し合い、法門の話聞いて見ると、吾子の語るところはもっともであり、今までの杞憂は晴れて、後生を子に導かれることに無上の喜びを懐かれました。聖人は開宗後、最初に父母の皈依を得たことを喜ばれ、改めて、父には妙日、母には妙蓮の法名をおくられ、聖人ご自身も蓮長を改めて、日蓮と名を改められました。

聖人は、日蓮と名のられたことについては、「明かなること日月に過ぎんや、浄きこと蓮華にまさるべしや、法華経は日月と蓮華となり、故に妙法蓮華経と名づく、日蓮また日月と蓮華との如くなり」と言われて、その名の出典を法華経にもとめられています。

父母の皈依を得、自ら戒師となることのできた聖人は、心おきなく正法を弘める態勢がととのえられました。

(10) 鎌倉辻説法

郷里において開宗の宣言をし、父母の入信を得た聖人は、故山を發って鎌倉へ向われることになりました。この時の道順は、安房の西海岸の今の南無谷、そのころの泉谷から船で、東京湾を横切って、今の横須賀、そのころの米ヶ谷に渡り、そこから鎌倉に出て、名越の松葉ヶ谷に庵をかまえて、ここを鎌倉弘経の根拠地とされました。

松葉ヶ谷での第一期のご生活は、建長五年の後半から、正嘉二年、岩本実相寺の経蔵にお入りになるまでの約五年の間のことです、最初の年には、此叡山に学んだ学友の威弁が松葉ヶ谷の草庵を訪ねて、聖人の弟子となりました。

後に名を日昭と改め、聖人の有力な弟子の一人で、六老僧の中に名を列ねている人です。

聖人は、鎌倉の都で、法華経の積極的な布教を決意されました。庵室では法華経を読誦し、深い教理に思いを沈め、仏の教法と世相とを考え合せて座視することのできないものがありました。

聖人は決して一宗一派の開祖となろうと いうようなお気持ちはありませんでした。願うところは仏の心にかなうことであり、それはとりも直さず、法華経に皈一することでありま

した。念仏も禅宗も真言も、何れもそのよりどころとする經典も皈依する仏も時機不相応であり、

その教法では人仏道はおぼつかない。末法には法華經のほかに取り出すお経はなく、頼む仏は本師釈迦牟尼仏であるという、固い信念が慈悲心となって外にあふれて、一切衆生の未来の苦を救うための絶叫となり、聖人の辻説法が行なわれました。

伝えるところによると、鎌倉の目貫通りの近く、小町の夷堂の側の広場で、聖人の辻説法が行われたということです。宗の悪口と聞いて怒るもの、狂気の沙汰とけなすものもあり、また熱心な信者が現われるようにもなりました。此時代に四条頼基・進士義春・工藤吉隆・池上宗仲・平賀有国・波木井実長等が有力な信者となりました。

(11) 実相寺での閲蔵

聖人が駿河の国富士郡岩本実相寺の一切経蔵に入って、一切経を閲覧されたのは正嘉二年と正元元年に亘ってのこととされています。鎌倉での伝道を四ヶ年続けられて後のことです。

建長の年号は八年まで続きましたが、八年の十月には康元と改められました。康元もわずかに五ヶ月しか続かず、二年三月にはまた正嘉と改められ、その正嘉の年号も三年目の三月には正元と改められ、正元の年に二年目の四月に文応と改元されました。

このように、聖入御年三十五のときに建長八年が康元と改元されてから、文応元年三十九の御年までの五ヶ年の間に、建長・康元・正嘉・正元・文応と五度の改元詔書が出されています。当時は不詳事が起ったりすると、そのあとを断って、さらにそれが続かないようにとの念願から改元がなされたものですが、このような、度々の改元が示しているように建長の末年からは、時ならぬ天災地変が引き続いておこりました。

とくに正嘉のころは大地震・火災・暴風・水害・長雨・早魃という天災を受けて飢饉・疫病が流行し、人も牛馬も道にたおれるという惨状だったのです。

諸国の社寺では国土安穩の祈祷を捧げましたが災難はいよいよつのるばかりです。

当時のありさまは吾妻鑑に書かれており、聖人の遺文にも記されています。

国土の災禍を目のあたり見られた聖人は深く心に期すところがあつて、実相寺の経蔵にお入りになられたのです。

すなわち正法の法華經を捨てて、時代に 適しない教法が行われているから、善神は国を去り、人心の乱れにつけ入って悪鬼が災をおこすのであると見透かされて、座視することができず、經文に照して世相を判定し、正しい方向を指示すべく、一切経の閲覧を決行されたのです。

末法の今の世は正法に依らなければ国家の安穩は期しえないと論じられた守護国家論は立正安国論の草案といわれていますが、此書は安国論上書の前年、正元元年の著作であります。

(12) 立正安国論の上書

立正安国論は聖人が幕府を諫めた第一声であり、三諫中の第一諫の書であります。岩本実相寺経蔵に一切経を閲覧してから三年目の文応元年七月十六日に、立正安国の論策の書を前の執権で、幕府の実権者であり、此書を呈する相手と してもっともふさわしい最明寺時頼入道へ上書すべく、聖人は時頼の近臣、宿屋左衛門光則に面会してその進達方を依頼されました。

立正安国論は、その真蹟が現に中山聖教殿に格護されています。この書は仮名文字は一字も使っていませんが純粋な漢文ではなく、いわば鎌倉の時代文ともいべきもので、四六駢儷体で書かれていますから語調の良い文章で力のこもった名文です。

内容は十段になっていて、客と主人の問答の形で筆が進められています。

旅客来って嘆いて曰く、近年より近日に至るまで天変地妖、飢饉疫癘、遍く天下に満ち、広く地上に迸る。牛馬巷に斃れ、骸骨路に充てり。死を招くの輩、既に大半を超え、これを悲まざる族、敢て一人もなし。

これが、その冒頭の文ですが、このような調子で書き進められています。

その趣意は、打ちつづく災難は、国主も国民も、正法法華経にそむいて邪法邪師に皈依し、選釈集に迷わされて、念仏の邪法を信ずるところから、善神は国を去り、悪鬼が人って来たために起ったものである。

今にして国民が信仰を改めなければ災難を除くことができないばかりでなく、やがては国内の乱れと外敵の難が起ること必定であると、金光明経・薬師経・仁王経・大集経・涅槃経・法華経などの経文をよりどころとして論述され、速く信仰の寸心を改めて実乗の一善に皈せよ」とすすめられ、結論として「汝、そのままに仏国土となり、その国は直ちに宝土となるであらうと結ばれています。

これは聖人が仏弟子としての直言であり、経文に確証をもとめて得た不動の信念でありました。

立正安国論の予言が悲しくも事実となって、内乱と外敵の難が文永・弘安年間に起ることになりました。

(13) 松葉ヶ谷の夜襲

立正安国論の上書は鎌倉の町に知れわたり、人々の話題の中心となりました。日頃、聖人の主張に反感をいだく人達は一段と憎しみを燃えあがらせました。念仏を信じ、禅に心を上せた時頼は、安国論の論説を直ちにとりあげて政治的に実現しようとする意志は全く示されませんでした。

立正安国論はついに時頼の手もとに握りつぶされてしまったのです。

末法には邪悪の教え、時機不相応の法として、その禁絶を宣言された聖人に対する反感は、念仏信者の間に急速に高まって「日蓮を倒せ」という叫びとなってひろがりました。

幕府がお用いのない法師はどうしようとおとがめのあるはずはないと反日蓮の徒党のかり集めが行われたようです。

その背後には念仏系の宗観に受法した執権の大叔父にあたる極楽寺入道宗時の力も大きく動いていたとも見られていますが、安国論上書から四十日ばかりすぎた八月二十七日の真夜中に、松柴ヶ谷の聖人の庵室は数百数千の大勢の徒党によって夜襲されました。

四大法難の最初がこの松葉ヶ谷の夜襲です。

この夜、聖人は庚申の法味をささげていられましたが、どこからともなく白猿が聖人を庵室の外へと誘い出すままに、裏山の山王社に出かけておられたために、この災厄を逃れることができたと言われています。

庵室には進士太郎善春が先頭に立って暴徒に対し、能登房等もこれに従って庵室を守ろうとしましたが、多勢に無勢で庵は壊され、住むに堪えないものとなってしまいました。

聖人はこの時のありさまを下山御消息に次のように述懐しておられます。

国主の御川いなき法師なれば過ちたりとも科あらじとや思いけん。念仏者並に檀邦等、又さるべき人々も同意しけるとぞ聞えし、夜中に日蓮が小庵に数千人押寄せて、殺害せんとせしかども、如何したりけん其の夜の害にも免れぬ。然れども心を合せたる事なれば、寄せたる者も科なくて大事の政道を破る。

(14) 若宮法華堂の布教

聖人外護の大檀邦として名の高い宮木五郎胤継は字か常忍といった人で、聖人より六才の年長で、一説には、聖人の叡山遊学時代の資援者であったとも伝えられていますが、建長六年に法縁を結んだと見られています。

聖人は富木氏を信頼されて、後に佐渡へ流される途中、寺泊から送られた「寺泊書」や佐波から送られた大切な教義書の多くは富木氏を通して一門の人々に示されておられます。富木氏は後年、聖人の身延時代に入道して常修院日常と改名されていますが思うところあって袈裟を着けず、終世居士をもって任じたといわれていますが、学解も深く、聖人はこの人を信頼されていたことが伺えます。

富木常忍は下総若宮に居住していましたが、鎌倉松ヶ谷での聖人の受難を聞いて、人を遣して聖人を下総の自邸に招請され、此処に下総若宮を中心とする聖人の布教々化がなされたと云われています。

常忍は若宮の邸内に法華堂を建て、聖人は此処で百日説法続けられ、近隣から多くの人達が聴聞に集りましたが、中でも會谷教信、秋元太郎、太田乗明等は篤信の高名をのこした人々です。

教信は後年身延に詣でて入道して名を法蓮日礼と名けられ、乗明け一子太郎を法弟としま

したが、この人は常忍の妻の甥にあたる人で後に中老僧日高と呼ばれる人です。

聖人の霊跡であり、また御真筆格護の霊地として知られる中山の法灯の基礎には富木常忍とその一族の外護と皈依の力の厚かったことを忘れてはなりません。

(15) 由井が濱の別れ

弘長元年五月十二日、松葉ヶ谷の夜襲の難から十ヶ月程過ぎたこの日、再建された草庵に帰られて、鎌倉の伝道につかれてから間もなく、聖人は突然罪人として召し捕られ、由井が浜から伊豆の伊東へ流人としてのあつかいを受けることになりました。

この思いがけない受難は、時の為政者によって決行されたのです。

この辺の消息は「妙法比丘尼御返事」や「下山抄」そのほかの御書に書きしるされています。

すなわち時の執権職におった長時は、聖人がはげしく批難された極楽寺良観の熱心な帰依者であった極楽寺重時の子で、長時は父の意を汲んでか理不尽にも、いっぺんも取り調べもなく、いきなり流罪にしてしまったのです。

聖人ご自身は、法華経を弘める者に難儀のふりかかることは、すでに覚悟をせられており、門弟の人々にも迫害に負けてはならないことを常々教訓されておられましたが、聖人を敬慕する弟子信者の悲嘆はたとえようありませんでした。

由井が浜の船出にあたってこの図のような師弟別離の悲劇が伝えられています。

この物語りは註画賛では急のことで日朗（当年十七歳）ただ一人聖人のお供を伏して別れ悲しんだ時、聖人は唐に渡った寂照がなごりを惜しむ母をなぐさめた古事をあげて「月の入るを見れば日蓮伊東にありと思え、日の出るを見れば日朗此のはまにありと思ふべし」と言われて、たがいに袖をぬらしたと記されています。

ところが、真実伝には描写が複雑になって、浜辺には荏原・池上・進士等に人々が集り、日朗は比企谷にいたが急を聞いて素足で出船間際に駆けつけて、出船の纜にすがりついて声をかぎりに同船を嘆願したが、聞き容れられればこそ、船人はこの邪魔ものとはばかりに櫂をふりあげて日朗の右手を打ちくだき、日朗はしばらく気が遠くなったが、やがて聖人の呼び声でわれに皈って浜辺を離れゆく聖人の姿を嗚咽と共に法華経の要文を誦読して見送ったと伝えられています。

ともあれ、柱とたのむ師聖人と別れた日朗をはじめ鎌倉に在往する門下の人たちは手足をもぎとられたような思いで悲嘆にくれたことはおおいかくせないことでした。

(16) 俎岩の危機

聖人を乗せて由井が浜をこぎ出した船は伊東の浜辺には程遠い、岬はずれの離れ岩に船を着けて聖人をそこに降して立去ったとつたえられています。

この岩は俎岩とよばれる難所で、干潮時には海上に浮んでいるが、潮時とともに岩は次第に海中にのまれて満潮時には全く海中に沈んでしまうという恐ろしい岩だったので。ここに立たされた聖人はおりからさしこむ潮時に刻々と生命の危険にさらされていたのです。

その中であって聖人は静かに誦経唱題せられていましたが、日の暮れと共に波は高く岩に押しよせて、遂に聖人は岩の上に足の踏み場もなく、今にもさかまく波浪に身をさらわれようとした時、折よく帰り船をあやつって通りかかった漁夫に助けられ、漁船に身を移して、危機を脱れることができました。

註画賛には「由井のはまより、ひとり舟にのり、かわなの津につきたもう、宿のあるじをば舟守の弥三郎という、日蓮舟よりおりくるしみたもうに、夫婦心を同うして、ねんごろにつかえ」とあって、俎岩のことは書かれてありませんが、舟からあがって苦しまれたことは、弘長元年六月の御書にも見えていますから川奈に着かれた時は普通ではなかったことが相像せられます。

真実伝などには、俎岩の場面をこれまた劇的な一場面として書がれていて、このことが舟守弥三郎との結縁の発端となっています。

(17) 舟守彌三郎の救助

伊豆の流罪は、聖入御生涯中の四大法難の第二にあげられています。

第一番目はさきの松葉ヶ谷の法難です。表面は流罪ということにして、裏ではひそかに亡きものにしようとの奸計がめぐらされていたと考えられるふしもあります。

ともあれ、伊豆での危機は川奈の名もない漁師だった舟守弥三郎によって救われ、ひと月ばかりの間、弥三郎夫婦の供養をうけて川奈の海辺にすごされました。

しかし流人をかくまうことは許されないことであり、とりわけ女房の心配は身にふりかかる災難を思うてどうしたものかと案じたことは、ひととおりでなかったようですが、目のあたり聖人に接して、崇高な人格と正法の教えを聞いて、心から聖人に帰依し、聖人をお守りする決心を固めました。

つたえるところによると、弥三郎の住居近くの岩屋に聖人をかくまい、食事を給仕して供養を申しあげたと云われています。

翌六月二十七日付で舟守弥三郎に送られたというお便りには、並々ならぬ言葉をもってその時のお礼を申しのべられています。

すなわち、日蓮。五月十二日流罪の時、その津について苦しんでいるところを手あついばかりをうけたのはただごととは思えない。

過去に法華経の行者だった人が今舟守の弥三郎と生まれかわって日蓮を助けたもうたのであろうか。

ことに米の乏しい五月のころにもかかわらず内々に給仕供養せられたことは「日蓮が父母

の伊豆の伊東かわなと云うところに生れかわりたもうか」とも、「教主大覚世尊の生れかわりたまいて、日蓮をたすけたもうか」と述懐されているほどです。

(18) 伊東八郎左衛門の帰依

聖人が川奈に身をかくしていられたころ、伊東の地頭、伊東八郎左衛門がえたいの知れない病気にかかり、医師が手をつくしても医薬の効なく、祈祷師が秘術を傾けても靈験なく、次第に病が重くなるばかりでした。

たまたま聖人が川奈に居られることを聞いて、聖人に病気平癒の祈りを懇請をしました。

祈る心は正しい心をもって道に叶った祈りでなければなりません。

聖人は「体まがれば影ななめなり」といわれて、自らを正しくすることを祈りの条件とされています。聖人は他人の祈りをただ取次ぎをするようなことはされておりません。

法華經を信じない人には「日蓮が祈の力、及びがたし」と云い切っておられます。

伊東八郎左衛門の病は、聖人の祈りによって不思議に平癒しました。

八郎左衛門はこれによって法華の信者となり、伊東の海中から感得した立像の釈迦仏を聖人にささげました。

この釈迦像は聖人の御持仏として佐渡でも身延でも大切に奉安された御像であります。

病の祈りを縁として法華經に帰任した八郎左衛門は、十数年後の御書によるとどうしたことか退転してしまったことがしるされています。

「伊東の八郎ざゑもん、今は信濃守は現に死にたりしをいのり活けて、念仏者等になるまじきよし明性房におくりたりしが、かえりて真言師になりて無聞地獄に墮ちぬ」とあるのがそれです。

弘長三年二月流罪赦免まで、足かけ三年の間、伊東に御在住になられましたが、この間に聖人の感化に浴しか人々は少くありませんでした。

『四恩妙』『教機時国妙』などという大切な法門を書かれた御書もこの間に作られました。聖人が自ら「法華經の行者」という体験的な力強い言葉を使いはじめられるようになったのはこの教機時国妙からのことです。

(19) 慈母の治病を祈る

弘長三年に赦されて鎌倉にかえられた聖人は、翌文永元年（行年四十二歳）の秋、郷里房州へむかわれました。

建長五年以来、満十一年目の帰省だったのです。父はすでに、聖人が岩本実相寺に隠居中の正嘉二年二月十四日に亡くなっておられましたので、父の墓前に読經もし、また老いた母を慰め、師の道善御房に正信を勧めたいという孝養の気もちからの御帰省であったのでありましょう。

ところが、小湊の母の家に着かれたとき、母は病重く、すでに息をひきとられたあとだったのです。孝心の厚かった聖人の悲嘆は非常なものでしたが、心からなる聖人の法華読誦の声が母の魂にふれ、仏神の感応によって不思議にも一たん息絶えた母が蘇生するという奇蹟がおこりました。

中山聖教殿にある御真蹟書の『尼ごぜ御返事』と宛名されたお便りの中には、日蓮が母をいのって身の病を癒したばかりでなく、さらに四年の寿命を延ばしたことを述べられて、日蓮悲母をいのりて候しかば、現身に病をいやすのみならず、四箇年の寿命をのべたりと、書かれてあります。

懐しい母と話しをかわし、母をなぐさめられた聖人の喜びはさることながら、この奇蹟を目のあたり見た村人たちの聖人への信頼は一層高められました。

(20) 小松原の法難

小松原の法難は四大法難の第三にあげられる大難で、文永元年十一月十一日の夕刻のことでした。

小湊をあとにした聖人は、安房花房に滞在して師の道善房に法華の正信を説かれました。一方先年清澄山で遺恨をはらすことのできなかつた東条景時は、時こそよしと聖人を討つおりをねらっていたのです。

この日、聖人は花房から約一里ばかり東の天津へ出発されました。天津には信者の工藤左近将監が住んで居りましたが、その招きをうけて工藤邸へ向われたのです。聖人の一行は鏡忍房をはじめ乗観、長英等の数人でした。小松原は花房から天津への道すじにあたります。

夕暮近く聖人の一行がここに通りかかるのを景時は大勢の暴徒を引き連れて待ち伏せていたのです。暴徒は弓矢を持ち刀を抜いて襲いかかりました。

聖人はこの時のありさまをつぎのように書きしるされています。

十一月十一日安房の国東条の松原と申す大路にして中西の時（午後四時から八時の間）、数百人の念仏等にまちかけられ候て、日蓮は唯一人、十人ばかり、ものの要にあうものはわずか三四人なり、いるやはふるあめのごとし、うつたちはいなづまのごとし、弟子一人は当座にうちとられ、二人は大事のてにて候、自身もきられ、打たれ、結句にて候いし程に、いかが候けん、うちもらされていままでいきはべり、いよいよ法華経こそ信心まさり候へ（文永元年十二月十三日の南条御書）

凄惨のありさまはこの一文によくうかがうことができます。鏡忍房はおともの中でも腕利きのものでしたが、聖人をお守りしようとして討死してしまいました。

聖人は顔に疵をうけられましたがあやうく難をまぬがれることができました。聖人はこの受難を法華経の行者として試練であるとせられて、いっそう法華経への信心を強くされま

した。

(21) 工藤吉隆の殉死

小松原に殉教の血を流したのはお供の中の鏡忍房と今一人は、この日聖人を自邸に招請した工藤左近将監吉隆その人だったのです。

工藤吉隆は忠吾、忠内の二人の供を連れて聖人をお迎えに出た矢先にこの暴挙に出会い、自分が聖人をお招きしたために景信に計られた責任を痛感し、聖人の身に万が一のことがあっては一大事と、多勢の中に切り込みましたが、衆寡敵せず、深傷を『負うてあえない最後を遂げました。

聖人は吉隆の死を悲しまれ、とくに妙隆院日玉の法号をおくってねんごろに菩提をとむらわれました。

吉隆にはこの時遺腹の子がいましたが、遺志によって後に聖人の弟子となり、刑部阿闍梨日隆と名のって、父の殉教の地小松原に妙隆寺を建て、鏡忍房日暁を初祖とし、父日玉を二祖に、自らは第三世に名を列ねました。

この寺は後に寺号を鏡忍寺と改めて今にいたっています。

現在の天津日澄寺はもと工藤家の菩提寺で真言宗だったのを日澄がときの住持と法論して改宗せしめたところから寺の名を日澄寺とつけられたといわれています。

日澄寺にもこの二人の殉教の霊がまつられております。

聖人は小松原の難に「頭に疵をかうむり左の手をうちおらる」と述懐せられているように文字通り刀杖の難をお受けになり、身をもって法華経の経文を行ぜられました。東条景信は「法華経の十羅刹のせめをかうむって早々に失せ」と書かれているように、このことがあって間もなく狂死したということです。

(22) 蒙古の使者来牒

文永五年（聖寿四十七）正月、そのころ大陸に武力をふるって東西に国威をのぼしていた蒙古王忽必烈の使者黒的が国書をもって太宰府にやってきました。

これよりまえ、文永三年に蒙古は高麗を通してわが国をしたがえようという気配があったのですが、ついにこの年に至って直接の使者到来となったのです。

これに対して、二月には朝議のすえ、蒙古の牒状はわが国を侮ったものであったために、返牒しないことに議決されました。

しかしこの態度に出るからには、蒙古の襲来を覚悟せねばならなくなり、二月末には幕府は讃岐国の家人に対して蒙古人の襲来に備えさせることになりました。

大蒙古国が小日本国を攻めるといふ容易ならぬ情勢に立ちいたったのです。

日蓮聖人は先きに上書された立正安国論に外敵の襲来を予言されています。すなわち今

にして仏法の邪正をたださずして法華経の信心を確立しないならば、金光明経や仁王経に説かれている他国から攻められるという大難の起るのは必定であるというのです。

この予言が安国論の上書からかぞえて九年目に、直面の事実となっておそいかかってきたのです。

聖人は文永六年に安国論奥書を書かれて、現状が勘文に叶うことをのべられて「この書は徴ある文なり、これ偏に日蓮の力にあらず、法華経の真文、感応の至す所なるか」と述懐されています。

蒙古の来牒は法華経の正信を確立することの急務であることを教える一大警告にほかならぬと痛感された聖人はこれを機会に八月と九月に幕府に書を送って詰問されたようですが、それに対する反応は示されなかったようです。

そこで十月十一日に執権時宗をはじめ宿屋入道その他為政者および建長寺道隆、極楽寺良観等の十一ヶ所に書を送って、時局対策の根本方針についての公場対決を申し入れられました。

これに対する聖人のお覚悟はもとよりのことですが、弟子信徒にも書をおくってふかく訓誡されるところがありました。

(23) 雨のいのり

文永八年（聖人五十才）春から夏にかけて、日照りがつづいて大旱魃となりました。水は潤れて作物は生長せず、悪風吹いて砂塵をまきあげ、人々は雨の降るのを千金のおもいでまち望みましたが、空には雲さえ見えぬ日がつづきました。

持律堅固の名僧とうたわれた極楽寺良観が六月十八日から七日の間、一山の大家衆をひきいて雨請いをする事になり、人々の期待は大きくこれにかけられました。

聖人はこの雨請いを機会に良観との対決を申込まれ、もし七日のうちに良観の祈りが叶うて雨が降れば日蓮は良観の弟子となって持往者に転向しよう。

しかし降らなければ良観の持戒は真の仏法ではないことを表明するのにほかならない。

よってこの旨を、周防房と入沢入道という念仏者に云いふくめて良観に伝えさせました。

ところが七日をすぎても一滴の雨も降らばこそ、ますます日は照り八風吹きすさむというありさまでした。

七日の祈りはさらに七日つづけられ、十四日に延長されましたが、遂に良観の雨請いは反応なくおわりました。聖人は書を送って再三これを難詰されました。

良観は涙を流し、弟子や信徒は声をあげて口惜しがったと記されています。

良観が雨請いをした後に、聖人は七里ヶ浜の田辺が池のほとりで雨をいのって法華経読誦されると、今まで吹きすさんだ風は止み、感応たちまちに表れて旱天に雲をよび、慈雨が降りそそいだと云われています。

(24) 八幡社頭の諫言

聖人には微塵の私心とてなく、仏法の邪正をただし、時とところに適応した教えを弘めて人心を安んじ、国を泰らかにしたいとねがうほかには何ものもなかったのです。

「法華経の行者」、「仏の御使い」ということばはここから発せられたことばであり、意表をついた八幡の諫も聖人のこの立場から出たものです。

これよりさき、かねてから聖人に敵意をいただいていた念仏者その他の徒党の計略にうごかされて、九月十二日（文永八年）の昼すぎものものしく物の具に身を固めた平頼綱のひきいる捕吏の一群が、あらあらしく松葉ヶ谷の庵室をとりかこみ、おりから法門談義中の聖人を罪人として召しとらえました。

このとき聖人は所持の法華経の第五の巻で打たれたことについて、「刀杖を加える者あり」と書かれた巻五をもって打たれたことは、いま身をもって法華経を読むものであると、法悦の涙を流されました。

難を受けて聖人の信念はいよいよ堅く、平ノ頼綱にむかって「只今、日本国の柱を倒す」と竭破されました。幕府の評定は内々聖人を極刑にしようと決せられていたのです。

公廷に引出されて形ばかりの詮議をうけましたが、それは真相の究明ではなく、予定の筋書どおり表面遠島ということにして、途中において亡きものにしようとたくらまれていたのです。

九月十二日の夜、聖人は裸馬にのせられて刑場に引されることになりましたが、その途次、八幡社頭にさしかかったおり、聖人は馬をとめて社殿にむかい、法華経守護の神である八幡大菩薩がいま法華経の行者の危難に靈験を示さぬは何ごとか、「いかに八幡はまことの神か」と故事を列ねて、叱咤諫言せられました。衛護の士卒はその意気におそれて、ただ呆然とするばかりでした。

「法に依って人に依らず」の聖句が思い合わされます。

(25) 四条金吾との対面

聖人に帰依した武士の中でも、四条金吾は終生、法華経の信心を身に行った人です。そのために人生の難関にぶつかったこともありましたが、そのようなおりには、処世の道を聖人にたずね、聖人はねんごろに書を送ってこまやかに指導されました。

聖人も四条金吾を厚く信頼され、翌九年に佐渡にあって心血をそそいで書きとめられた、一代の重要論策である「開目妙」は四条氏にあてて送られたものです。

九月十二日夜、表向きは流罪というもののおだやかならぬ気配をはらんで鎌倉の街を引き廻された聖人は、八幡宮前から、由比ヶ浜を西に向い、長谷にさしかかりました。おりからこの地に住んでいた四条金吾兄弟四人は、聖人の危難に驚いて駆けつけ、聖人の変った姿を見て悲しみの涙にかきくれ、金吾は腹切って殉死の決意を固めました。聖人

はそれをとがめられ、受難の法悦とその心がまえを訓誡せられました。

種々御振舞書には、道中で警吏のゆるしをうけて熊王を金吾の邸に遣されたと書かれています。

そして悲嘆にくれる金吾に教誡されて「日蓮、貧道の身と生れて、父母の孝養心に足らず、国恩を報すべき力なし、今度頸を法華経に奉りて、その功德を父母に回向し、その余をば弟子檀那にはぶくべし」とのべられています。

死に直面された聖人が、親を思い、国を案じ、弟子、檀那への心遣いと法華経に身をささげられた決意こそ聖人の平常心にほかなりません。

その尊い心事に感銘をおぼえずにはいられぬものがあります。

(26) 牡丹餅供

由比ヶ浜から極楽寺切り通しをすぎ、七里ヶ浜を通過して、竜の口へと夜の道を馬上に身を運ばれる聖人は、まことに法華経の行者の化身と申すべきです。

「われ身命を愛せず、但だ無上道を惜しむ」という法華経の文字を身をもってお読みになったお姿であり、身はしたがえられても、心はしたがえられずというご心情であったと拝察することができます。

伝記には、竜の口への道中で貪しい老婆が聖人に最後のお供養にと牡丹餅の供養をささげたという物語りが伝えられています。

真実伝によると、七里ヶ浜をすぎた津村の村はずれに住んでいた一老婆が、先年鎌倉で聖人の説法を聞いて感銘し、それからは朝暮にお題目をとなえる身となっていたが、今宵人すでに聖人の受難を知って、せめてもの供養にと小豆を煮立てて、仕度にとりかかったが、心せくほどに小豆は煮えず、時はせまって詮方なく、あり合せた胡麻をとり出して、餅にまぶし、盆をとり出す暇ももどかしく、鍋ぶたの上に餅をならべて、おりから通りかかった馬上の聖人に、足もともたどどしく駆けよって、涙ながらにさしあげたところ、聖人は厚くその志をお受けになれたと云われています。

九月十二日の御法難会に牡丹餅または胡麻餅を供えるのはこれに由来するのです。

(27) 龍の口の首の座

聖人はその夜（文永八年九月十二日、聖寿 五十歳） 「竜の口」の処刑場に引すえられました。

これは表向きのことではなく、ひそかにたくらまれたことで、幕府では聖人を佐渡に遠島という名儀にして、その途中、聖人を殺そうと謀ったのです。

幕府の憲法ともいべき北条寮時が撰定した『貞永式目』には五十一ヶ条の項目があげられていますが、その刑罰の項には、僧侶の極刑は遠島と定められていて、死刑は許されて

いないのです。

非道はないのうちに計画され、警吏の一行は、竜の口に聖人を乗せた馬を引き入れたころには、波音高く打ちよせる浜辺の刑場には、処刑の準備がととのえられていたのです。

生き死にを超えた法華經の信仰に生命を宿された聖人は、自若として顔色ひとつお変えになりませんでした。随行してきた信徒の悲嘆は限りないものでした。

四条金吾が諸肌ぬいで、腹かき切ってお供せんと決意したのはこの時です。

首切り役人が、太刀引き抜いて聖人の後にまわり、合掌唱題する聖人に、太刀打ちおろそうとした時、にわか一天かき曇って、江の島の方から月のような光りものが、すさまじい勢いで飛び来って、辰巳から戌亥の方角へと走りすぎた。

思いがけない奇跡に、太刀取りは目がくらんでその場に倒れて気を失い、警士は怖れあがって逃げまとい、生きた心地のない有様でした。聖人は、夜が明けては見苦しい、早く切れと申されましたが、この不思議な現象によって処刑は失敗におわりました。

この法難は、第四の大難にかぞえられています。聖人ご自身が「日蓮といいし者は、去る年九月十二日子丑の時に頸刎ねられぬ」と述懐せられているように、これをご生涯の体験的転期とせられています。

(28) 星降りの靈驗

竜の口に聖人を切れなかった幕府は、名目どおり、佐渡に島流しということにして、聖人を佐渡の領主本間六郎左衛門の家にあずけることになりました。

聖人が相模川に添った相州依智の本間の邸に着かれたのは、翌十三日のことでした。昨夜の危機を思えば、遠島とはいえ、四条金吾は心も軽く、聖人にお供して本間邸に入り、聖人の心づくしで警士の兵にふるまいなどをされました。

その夜は、後の明月で、さえた月が空にかかっていたが、聖人は夜中に、庭に出られて、月にむかって自我偈をいくたびが読まれたのち、法華經のあらましを申し述べられ、名月天子は法華經の會座には列座の衆に名を列ねているばかりでなくま宝塔品では仏勅を受け、囑累品では仏に頂を摩でられて、この經を弘める誓いを立てている。

いま日蓮が法華經を行じてあるときこそ誓言のしるしを果すべきに、何の驗もないのはどうしたことか。大集經には「日月明を現ぜず」仁王經には「日月度を失う」、最勝王經には「三十三天おのおの瞋恨を生ず」と説かれている。

驗はなくとも嬉し顔に澄みわたっているのは、どうしたことかと責めたてられました。

すると、たちまち奇跡が現れて、天より明星飛びきたって、庭の梅の木の枝にかかって光りかがやき、空かき曇って「空のひびくこと鼓の如し」と書かれています。

昨夜の光りものにつづいての、この奇端に警固の兵は驚いて、椽から飛びおり、座にひれ伏すもの、家のうしろに逃げこむものもあって、ただならぬ光景を呈したと伝えられています。

聖人は依智にとどまること、約一ヶ月、十月十日にここを出発して、佐渡にむかわれ、十月二十八日に佐渡の国へお着きになりました。

(29) 土牢の日朗

聖人召捕りの翌十三日には、松葉ヶ谷の草庵は取りこわされましたが、恩師をしのんで草庵を離れるにしのびなかった日朗は、その場で捕われの身となり、居合わせた幼少の日進もとらえられて、鎌倉長谷の土牢に幽閉じの身となりました。

日朗たちが、土牢に入れられたことを聞かれた聖人は、弟子たちの身を案じ、罪なき身が、この寒空にどうしてすごしているであろうかと、ひそかに涙を流され、ふかく心を痛められました。権勢や威圧に恐れぬ聖人も、弟子を思い信徒を案ぜられる心情は、まことにこまやかなものがありました。

聖人が依智から土牢に送られた消息が二通つたえられています。その中、一通は直蹟が現存しており、それは十月三日付で「五人御中」と宛名されています。それには、

今月七日さどの国へまかるなり、各々は法華經一部ずつあそばして候へば、我身竝ビニ父母・兄弟・存亡等に回向しまし申し候らん。今夜のかん（寒）ずるにつけて、いよいよ我身より心くるしき申ばかりなし。云云

と書きおこされた一文で、佐渡へ出発の数目前（はじめ十月七日出発の予定が、十目に延期された。）のものです。

いま一通は、日朗宛の御書で、出発前日の十月九日付のもので、弟子を思う恩情のあふれた明文として親しまれているつぎの消息です。

日蓮は明日佐渡ノ国へまかるなり。今夜のさむさに付ても、ろう（牢）のうちのありさま、思いやられていたはしくこそ候へ、あはれ殿は法華經一部ヲ色心二法共にあそばしたる御身なれば、父母六親一切衆生をもたすけ給うべき御身也。法華經を余人のよみ候は、口ばかりことばばかりはよめども心はよまず。心ばよめども身によまず。色心二法共にあそばされたるこそ貴く候へ。（中略）龍をばし出ささせ給候はば、とくとくきたり給へ。見えたてまつり、見えたてまつらん。恐々謹言

文永八年未辛十月九日

日蓮花押

筑後殿

(30) 佐渡の三昧堂

文永八年十月十日に依智を立たれた聖人は、泊りをかさねて同月二十一日に越後寺泊に着かれ、順風を待って翌十一月二十八日に佐渡の松ヶ崎にお着きになりました。

二十九日に松ヶ崎から新穂の本間六郎左衛門重連の邸に入られ、十一月一日に本間重連邸のはるかうしろの塚原という山野の中の死人を葬るところにある、一間四面のくちはてた三昧堂を住居として与えられました。

翌年四月、一ノ谷に移るまで、約半年の間、聖人は三昧堂でのあけくれを過されました。

「空は板間合はず、四壁はやぶれたり、雨は外の如し、雪は内に積もる」という堂内で、聖人は持仏の釈迦像を立てまいらせ、蓑をきて日夜を過されました。

開目紗二巻の大作や、佐渡御書など、重要な論策は、この三昧堂でお書きになられたものです。

当世、日本国に第一に富める者は日蓮なるべし。命は法華經にたてまつり、名をば後代に留むべし

とは、開目妙の一節ですが、寒さと飢えに身をおかたれこの声は、凡情を超えたものであることは、同じく開目妙のつぎの句にうかがうことができます。

此は魂魄佐渡の国にいたりて、返年の二月雪中にしるして、有縁の弟子へをくれば、おそろしくておそろしからず。みんないかにをぢぬらん。「此は釈迦・多宝・十方の諸仏の未来日本国当世をうつし給フ明鏡なり、かたみともみるべし。」

我レ日本の柱とならん。我レ日本の眼目とならん。我レ日本の大船とならん、等とちかいし願、やぶるべからず。

この力強いことばは、「仏使日蓮」、「法華經の行者日蓮」の自覚がなくてはありえないところではあります。

佐渡でのご生活は、聖人にとって人間的にも、また精神的にも、内外に重要な転換をもたらされ、新生面を展開せられる機縁となったことは聖人ご自身が、これを述懐せられているところではあります。

(3 1) 阿仏房夫妻の給仕

阿仏房は遠藤為盛といい、もとは順徳上皇に仕えた武士で、上皇のお供をして佐渡に來り、上皇崩御の後には、夫婦ともに入道となって真野の御陵の側に居住して御菩提をとむらい、念仏三昧に日を送っていたところから、人よんで阿仏房といい、妻を千日尼とよんだと伝えられています。

聖人が塚原三昧常に配流されたことを知った阿仏房は、日ごろ信仰する念仏の法敵日蓮を生かしておいてなるものかと、聖人との対決を決意し、殺意をもって三昧常に出かけました。

三昧堂で聖人と相対した阿仏房は、聖人に説き破られ教えを聞いて、たちまちに念仏を捨てて、法華經の信仰に改宗する身となりました。

それからは、阿仏房は深く聖人に帰依し、妻の千日尼も心を合わせて聖人を供養しました。塚原と真野の間の一里をこえる遠路の道を、阿仏房は深夜に妻千日尼が心をこめた糧食を背に負うて、寒夜の風雪をいとわず往復する日がつづきました。国府入道夫妻もこのころから聖人を供養する人となったと見られています。

これらの人々の厚意によって聖人は飢え死ぬこともなく、一層深く法義を探究せられました。

た。

のちに聖人が身延にお入りになってからも、阿仏房は九十に近い老齢の身をもって、千里の道を達しとせず、三度までも身延に聖人を訪れましたが、その都度、聖人は干日尼に書を送ってその厚志を感謝されています。阿仏房夫婦の帰依の情がいかに厚かったかがしのばれます。

(32) 塚原問答

聖人が塚原三昧堂で、佐渡配流第二年目をむかえた文久九年正月十六日には、念仏真言そのほか諸宗の法師ら数百人が塚原の堂の周辺におしかけました。

念仏・真言者らの中には法敵日蓮が佐渡に流されてきたのをこのままに見すごしてはならぬという意見が強くおこっていたようですが、遂にそれが爆発したのです。

これまでこの国に流されたもので、生きながらえるものはない。

かりに生きながらえても、この国から帰るものはない。打ち殺してもおとがめはなかるう。

このまま放っておいては安らかでないから、何とか手段を講じようではないかとの義が佐渡の諸宗の人たちの間に直面した議題となったのです。

本間六郎左衛門のもとにこのことを如何にはからうべきかを問うたところ、幕府からの副状があつて、日蓮にもしもあやまちがあつては、役目の落度ともなることであるから、勝手な振舞があつてはならぬと誠しめられ、ただ一つの方法としては、法門の問答によって攻めおとすことを許されました。

この日集るものは、佐渡国はいうに及ばず、遠く越後、越中、出羽、奥州、信濃の国々から来たものです。

本間六郎左衛門は兄弟一家を引連れて警固にあたりました。

近くの百姓や入道も聴聞に集まりました。

多勢の念仏者は、日蓮を悪口し、真言師は顔色を変えて憤り、天合宗が勝つなどとさわぎたて、その騒騒しさは「さわぎひびく事、震動雷電の如し」と書かれています。

いよいよ名乗りをあげての門答となると、鎌倉で一流の学僧を論破せられた聖人に対するのですから、一言二言で説破されて「利劔をもて爪をきり、大風の草をなびかすが如」きありさまであったと書かれています。

かくしてこの日はすごすごと無為に引きあげましたが、翌十七日念仏者の旗頭であった印性房が問答を申入れました。『法華浄土問答妙』がその記録であるとされています。

(33) 真野御陵参拝

佐渡は新院とよばれていた青年期の順徳上皇が承久三年に配せられたところですが、上皇が佐渡に遷されたのは聖人ご生誕の前年のことでしたが、上皇は二十年の在島生活を

送られて仁治三年（一二四二）九月に崩御せられました。

聖人が佐渡に流されたのは上皇が崩御せられてから約三十年をすぎた頃のことです。聖人は承久の乱に三上皇を配所におくった幕府のやりかたを下剋上であるとはげしく批難せられていることでもあり、今聖人ご自身もまた上皇配所の地に流罪の生活を送ることはひとしお感慨を深くされたことと想像せられます。

塚原から真野の上皇の茶毘所までは往復に数時間を要する距離でもあり、また流罪の身で自由な外出がゆるされていたかどうかとも考えられ、真野陵参拝のことは定かな事蹟とは云えませんが、同じ配所の月を眺められた聖人は上皇のご生涯に心をよせられて、迫善のご回向はたびたびなされたこととおもわれます。

（34）一の谷庵室

佐渡に流されて半年足らずを人の住居とも思えぬ塚原三昧堂で過された聖人は、文永九年（二一七二）四月はじめに一の谷のある入道の邸に移されることになりました。聖人はここで文永十一年三月に赦されて鎌倉に帰るまでのまる二ヶ年を送られました。

このころから信徒の送りものがとどくようにもなり、海を渡って聖人を訪ねる信者もありました。四条頼基や「日妙」の名をおくられた特信の婦人などが聖人をたずねた人たちです。

一の谷入道一家の人々も聖人の風格に接して、感化をうけ、入道は内心に皈依しながらも改宗するにいたりませんでした。女房は聖人の信者となりました。

近隣の人々も聖人に好意をもつものが多くなり、近くの中興に居住した中興入道も熱心な皈依者となりました。

しかし反面には聖人をにくむ人たちも居て奸策をめぐらしましたがそれは表面化せずにおわったようです。

文永十年四月には「日蓮身に当っての大事」といわれた『観心本尊抄』を書き著わされて、さきの『開目抄』につづいて大事の法門を述べられて、末法の今の世にふさわしい教法とそれを弘める人について説かれています。

その年の七月には大マンドラを書きあらわされたとつたえられています。

このようにして聖人の佐渡三ヶ年の流罪生活は、ご自身の宗教を確立し、証明された大切な時期となっています。

（35）第三の諫言

佐渡流罪の赦免状は文永十年（聖入御年数え年五十三）三月八日に日朗がこれを持って佐渡に着き、流罪を許された聖人は十三日佐渡を発って三月二十六日に鎌倉にお入りになりました。

幕府では四月八日に聖人を召し出しましたが、このたびは従前の態度とは、うって変わった丁重な扱いで、平の左衛門尉は「あなたは蒙古が襲来するといわれるが、それは何時のことか」と問いました。

聖人は「経文には年月を明示されていないが、天の御気色少からず見えているから、今年をすぎるようなことはないと思う」と答えられました。

伝えるところによると、時宗はこの時聖人に蒙古の調伏を請い、愛染堂を城西に建てて別当とし、干町の田を付けるから、国家の安泰を祈ってほしいと申し出たが、自ら正法に帰依することが第一条件であるとして聖人はこれを受けなかったと云われています。

この国土に生を受けたものとして、身体は掟に随えられても、心は随えられるべきではない。

邪法、邪師に頼ればいそいで国が滅びるであろうと、聖人はここに三たび立正安国を説いて幕府を諫言せられました。これが第三の諫言です。

第一の諫言は文永八年九月十二日に平の左衛門に対して日本国の滅亡を諫言されたときのことを云います。

(36) 身 延 入 山

「仏の使い」、「法華経の行者」の自覚から出た聖人の、三度におよぶ命がけの諫言も、幕府の聞きいれるところとなりませんでした。

そこで聖人は、やむなく鎌倉から身を引くことを決心され、五月十二日に鎌倉をあとに甲斐の波木井実長の好意を受けいれて身延に向われることになりました。

身延入山の理由については三度諫めて聴かれずは、すなわち去ることばによられたとも、あるいは蒙古来襲にそなえるためとも、弟子信徒を養成して正法を後の世につたえるためとも云われていますが、聖人の入山を凡情から推し測ると、世間的にも人間的にも一抹の淋しさを感じさせられるものがあります。

身延入山の道筋は、五月十二日は鎌倉から藤沢、大磯、国府津をすぎて酒匂に、十三日足柄を越えて駿河路に入って、竹の下に、十四日は黄瀬川に沿って車返しに、十五日は沼津から吉原を経て富士の大宮に、十六日は富士川に沿って甲斐に入って、南部にと宿りを重ねること五泊、十七日に聖人の一行は実長に迎えられて身延にお着きになりました。

身延は波木井（富士川の西岸、南部の北からは西南四軒ばかりのところにあって、南に鷹取山、北に身延山、東は天子ヶ嶽、西に七面山がそびえという四方に四つの山をひかえ、この山をめぐる富士川、早川、波木井川、身延川の四つの流れがあり、その四山四流の中の手の広さはどの平地に庵室を結んだと、その光景を述べておられます。

(37) 池上兄弟の勘当

武蔵の千束、いまの池上に居住した池上家は左衛門太夫康光を家長として、その子に兄太夫志宗長と弟 兵衛志宗長の二人があり、親子三人は同じく幕府の工匠役を勤めていました。ところが信仰は親子相容れず、兄弟二人は、聖人が鎌倉で辻説法をされていた康元年間に四条金吾らと前後して入信した法華信者でしたが、父康光は念仏信者で極楽寺良観に皈依していた人です。この信仰上の対立は一家の事件としてもちあがりました。文にありました。池上兄弟の入信は聖人が鎌倉辻説法の時四条金吾らと同時の入信者です。聖人の信徒たちには信心が強ければ強いほど世間の迫害や威圧の手が加えられましたが、池上家の場合兄宗仲の勘当となって表れました。文永十二年にこのことが表面化し翌建治二年には勘気が解けましたが、その翌年には再度の勘気をうけました。しかしこれも弘安元年には許されて、宗仲の池上家相続となりましたが、この間にあって弟宗長と兄弟の妻二人が親子の間に入って取りなしたことが実を結んでこの結果となったものでした。

聖人は宗仲が初めの勘気をうけた時、文永十二年四月十六日に宗仲・宗長兄弟に長文の書を送られて、経文や古事をあげて法華経の信心を守りとおし、兄弟はもとより兄弟の妻がしっかり心を合せて、父を導くことが何よりの孝養であると、ねんごろな訓誡をされました。いま池上本門寺に所蔵の『兄弟妙』がそれです。

康光も晩年は心も和らぎ改信の情が見えはじめました。

(38) 遠藤盛綱の孝行

遠藤藤九郎盛綱は阿仏房夫妻の子で、両親の信仰を受けついで聖人に・皈依し、生涯を信仰生活にささげ、佐渡から北陸方面にかけて布教をつづけた人です。

盛綱の父阿仏房は、聖人身延ご入山の後も、妻千日尼にはげまされて、佐渡から甲州までの海山を越えての遠路を、九十に近い老軀をいとわず、三度も往復して懐しい聖人にお目にかかり、信仰を高め、心情を温めることを喜びとし、その都度聖人も千日尼が心づくしの供養の品々に佐渡の往時を追懐されて胸にせまる思いにむせばれるのでした。

阿仏房が三度目に身延の山に聖人を訪れたのは弘安元年九十才の時でしたが、阿仏房はもう高令のことでもあり、いよいよ今回が生きて最後の御対面と名残りを惜しむと共に、老先き短いわが身の死後は、せめてもわが骨を聖人のおそばに埋葬することをお許しねがいたいとの悲願を懐いて山を下りました。

弘安二年三月二十一日、阿仏房は九十一才で亡くなりましたが、その悲願は一子盛綱によって果されました。

満中陰をすませ、百ヶ日を期して盛綱は母千日尼に送られて父の骨を首にかけて身延出へ埋葬の旅につきました。

七月二日に身延の山で聖人のねんごろな回向を受け、身延に骨を埋めて、そこに墓を建てました。

聖人は佐渡の千日尼に手紙を書かれて尼御前をなぐさめられ、子にまさる宝はないと盛綱

の孝養をほめられました。

(39) 父母追恩

仏道に入って出家するひとは、世間のきずなを絶ち、「恩を棄てて無為に入るとはまことの報恩」のためであり、特に父母の重恩のことは、四恩のはじめにあげられているところで人の世の徳目として第一条件とされているところです。

法華經に一身をささげ、正法を弘めることに急がしく、世間的な孝行をつくせなかった聖人は、「父母の孝養心に足らず」と申されながら、波乱の多かった生涯の中で、喜びにも、悲しみにも、父母の慈愛と、追懐の情を持続けられました。配所で聖人を守った人たちには、父母の生れかわって日蓮をはぐくまれるのであろうと云われ、また、今生ではわが命にも変えがたい父母の生命を、たとえ絶ち切ると云われても、法華經の信心は捨てられないと、決意を示す言葉に引き合されているほどです。

信徒から供養された海苔を見ては、故郷を思い、父母を追懐された聖人は、身延に入ってから、朝座、夕座の廻向は言うにおよばず、時には、五十丁の山道を踏み分けて、はるかに東の空を見通す山頂に立って、房州小湊に骨を埋める両親を懐かしみ、心ゆくまで追孝の情を致されました。

奥の院の思親開が、その故地として今に伝えられているところです。

(40) 御草庵の改築

文永十一年、聖人が身延にお入りになってから、かぞえて八年目の弘安四年十一月、聖人御年六十歳のときに、草庵が改築されました。

もとの草庵は、四年目に一度倒れたのを修覆しましたが、それも今ではもう朽ちはてて、これ以上住むにたえなくなったからです。

改築された草庵は、前の三間四面よりは、ずっと広く、十間四面の大坊が建られました。大坊の柱建ては、十一月八日に挙行され、十日には屋根葺きが終わっていますから、人夫と大勢で取りかかったようです。

この大坊を中心にして、小坊があり、馬屋も作られました。小坊と馬屋は十一月一日に先に作られ、つづいて大坊が建てられました。

このころは身延に聖人を慕ってたずねる人が次第にふえて、毎日二三十人ものが集まるようになり、とうてい、もとの小庵では収容しきれなくなって、十間四面の大坊の建築となったものです。

十一月には、二十四日の大師溝を改築の出来上った新しい坊で、つとめられました。この日と前日の二十三日は天気もよく晴れわたってふかい雪におおわれた後ろの山々を背にした身延の沢に、大勢の信徒が参詣して「人のまいること洛中、鎌倉の町の中西（夕刻

どき)のごとし」と書かれていますから、大そうなにぎわいだったことが相像されます。そして、大師溝には三十余人のひとたちが集まって、新築の坊内で法華経の「一日経」書写の供養がおこなわれました。

この坊が、身延山久遠寺のおこりとなったところです。

(41) 蒙 古 来 襲

十三世紀の中ごろ、南宋を亡ぼして元の王朝を作った蒙古は、文永五年以来、たびたびわが国に来牒しましたが、幕府はこれに応じなかったため、ついにわが国にも侵略を企ててきました。

蒙古の武力は、まことに盛んで、シナ全土はいうに及ばず、遠く東ヨーロッパに兵を進めて領土を拓め、西は高麗を征服して大王国となり、やがて、海を渡ってわが国を随えようとする情勢は明らかで、また蒙古の武力からすれば、それは容易なことだったのです。

文永十一年には、壱岐・対馬を侵して北九州を襲いましたが、大風のために目的を果すことができませんでした。

北九州には厳重な警戒がしかれ、幕府の態度は強硬でした。翌建治元年には蒙古からの使者五人を竜ノ口に斬り、弘安二年の再度の使者も博多に斬ってすてました。

そして、国内では来襲にそなえて敵国降伏の祈りが各国の社寺で修行されました。

日蓮聖人は、かねてから二十年来警告してきた他国の侵略が、今事実となったのです。聖人は、この不祥事を来前に防ごうとして、正法法華経への帰信を身をもって勧告されたにもかかわらず、それが幕府の容れるところとならず不幸にも災難の到来となったのです。聖人の心はいかばかりであったのでしょうか。

この外敵の難は、幕府が聖人の進言を採用しなかった報いとも見られます。

弘安四年には、五月ころから蒙古軍は対馬・壱岐を侵し、六月には再び北九州博多に攻めよせました。閏七月には大軍を乗せた大船団が博多湾におしよせましたが、わが国にとっては幸にも一夜の大風雨によって大破し、戦わずして海底のくずと消えさりました。

蒙古来襲について聖人は遺文の各所に意見を述べられ、正法法華経の信仰をすすめています。

(42) 身延から池上へ

身延入山後の聖人は、建治二、三年ころから弘安元年にかけて、身体がめっきり衰え、慢性の下痢になやまされました。

一時は、定業かと云われたほどの下痢も、四条金吾の調薬で回復されましたが、二、三年後にはまた食慾がなくなり、肉は落ちて、寒さが厳しく身にしみるようになられました。弘安四年十二月のお便りには『このようなひどい寒さは、生れてはじめてのことです』と

書かれています。

身延在山九ヶ年の間には、法華経読誦の自受法樂のひと時や、弟子を相手に法門談義の時を過されましたが、また、おりにふれて信徒の人たちに遣された書簡は、不滅の遺訓としてかがやいていますが、聖人の肉体は年と共に衰弱されました。

弘安五年の秋には、この年の冬を身延で過すには堪えかねることを案じた波木井氏や、その他の人々のはからいで、その年の九月八日に、秋色ふかい身延を発って、常陸に湯治されることになり、道中、波木井氏の子息や若衆に守られて、ひとまず、武州池上の宗仲に向われることになりました。

身延出山の『道筋は、富士山を北にまわって八日は下山、九日は大井の郷、十日は甲府の曾根、十一日は黒駒、十二日は河口湖畔、十三日は吉田口下の呉地、十四日は足柄の竹の下、十五日は相州関本、十六日は平塚、十七日は瀬谷に泊りを重ね、十八日に池上に到着、宗仲の家に旅装を解いて、休養されることになりました。

(43) 聖人の御温情

正法をひろめ、国家社会の安泰と人心のよりどころを示された聖人は、権勢に屈せず、迫害におそれぬ剛毅な反面に、人の悲しみに泣き、人の苦しみに胸をいためるという、こまやかな温情の持ち主であられたことが、弟子信徒に遣わされた書簡に、それをはっきりと、見うけることができます。弟子や信徒への思いやりばかりでなく、処生上の指導や、日常生活態度や心のもち方にいたるまで、こと細やかに注意をされたり、子に先立たれた母には、まず、悲しみを共にして泣かずにいられないという御気性が、たびたびの書簡に、それをうかがうことができます。

聖人は、身延から池上に着いて、波木井氏へ送られた礼状が最後の書簡となったのですが、短い書簡の後半をついやして、最後の旅の乗馬への愛情が綿々と書かれています。

「つけていただいた栗鹿の馬はあまりに可愛いので、いつまでも失わないようにいたしましょう。

常陸の湯へも、引かせてまいりたいと思いますが、もし、人にとられてもいけませんし、また不憫でもありますから、湯から販りますまで、上総の藻原の殿のところへ預かっていただこうと思います。

それにしても、知らない舎人（馬丁）をつけておくのも覚うございますから、販りますまで、この舎人をつけておきたいと存じます。このようにご承知を願います』と、ありますように、聖人の温情は乗馬にまでおよぶ、こまやかなものがありました。

(44) 弘教遺囑

池上で床につかれた聖人の病状は、弟子信徒の熱心な再起の願いも空しく、十月に入っ

て病重く、ついにご自身も定命を覚悟せられるところとなりました。

聖人は病床にあって、衆を集めて立正安国論の講義をせられ、十月八日には六人の弟子をあげて、これを「本弟子」と定められました。

後に六老僧よばれる日昭、日朗、日興、日向、日頂、日持の各上人がその選にあげられた人たちで、正法弘通の後事を、これらの人たちを中心にして行うようにと遺囑せられました。

聖人が臨終の床にあって、弘教のご生涯を回顧せられて心に残ることの一つは帝都の弘教ということでした。聖人はこの遺業を果すために、日朗の弟子として入門していた、十三歳の少年経一磨の法器を見込まれて、枕辺に呼びよせられ、経一磨の手をとり、頭をなで、精進修行を怠らず、帝都への弘教をねんごろに遺囑せられました。

後の日像上人が、この時の経一磨で、上人は遺囑を奉じて、先ず、どのような苦難にも打ち克つために、並々ならぬ苦修練行の末、帝都の弘故に向い、永仁年間には、遺命にむくいる業績をあげられ、帝都弘教の祖と仰がれました。

異体同心に、二陣三陣と日蓮につづけ、とは聖人の日ごろの教訓であり、今に変らぬおことばですが、今日の教団には、これらの先師方の血が承けつがれており、これから後も、この精神は総承されなければならぬところです。

(45) 御歯の授与

敬慕し信頼する人を失うことは誰にとっても堪えがたいおもいであることには変りはありません。舍利をまつり遺骨を拝するのは故人をしのび、心にかようよすがであります。まして聖者のそれに対する場合は、また格別です。

日蓮聖人のご入滅にあたっては、六老僧をはじめ、弟子や信徒の人々に遺品の配分がなされました。

弘安五年十月には日興上人加筆をとって、その品目と配分された人たちの名が書きしるされている「御遺物配分の事」というのがあって、それによると聖人が御自筆でご所持の法華経に経論の要文をお書き入れになった「註法華経」は嗣法の弟子日昭に相伝されましたが、この教義学上もっとも大切な品を受けついで日昭は、さらに聖人ご存命中に、生き形見ともいべき品を授与されています。二粒の御歯がそれであります。

日昭上人自書の記録によると、聖人ご在世のおり、聖人の御歯二粒を直々に日昭が頂いたことが書かれてあります。

聖人なきのちも日昭は生身の聖人に接する思いでこの御歯を拝しつづけ、付法の弟子日祐に誠告して、日昭の法脈を継ぐものは末水く、この御歯を生身の聖人と思って拝すべきことを遺訓されています。

浜の法華寺は日昭の開いた法華の道場でありましたが、後にこれが玉沢に移されて現在にいたっています。

(46) 非 滅 現 滅

日蓮聖人は弘安五年（一二八二）十月十三日辰の刻（午前七時～九時）、数え年六十一歳の尊いご生涯を終えられました。このとき庭前の桜が、ときならぬに花を開いたと伝えられています。

送葬の儀は、弟子信徒の悲しみのうちに、池上で行われ、十五日夜、茶毘の行列は松明の明りを先頭にして、四条章金吾、池上宗仲、富木入道、太田入道、南条七郎、大学三郎、などの人々が、幡、香、鐘、散華、御持経、御書、御持仏、杵を棒持して棺前に進み、遺骸の御輿は日朗と日昭が前と後に入って肩にかけ、日興、日向、日頂、日持の弟子たちが左右に手をかけて茶毘所に運ばれ、夜半に火葬せられました。

十六日に遺骨を収め、二十一日に池上を出発して遺骨は、二十五日身延に送られ、中陰の供養をすませ、百ヶ日にあたる弘安六年正月二十三日に、新しく造った廟所に納められ、六老僧は山中に房を構えて、輪番で廟所に奉仕する制度がつけられました。

日蓮聖人には立正安国論のような論策書、教義を説かれた論著、そのほか弟子信徒に書き送られた訓誡の書が数多くあって、それが今に伝えられています。

そして、それらは皆、聖人が身をもって説かれた法華経の教えであり、それはそのままに現代に生きる聖人のご精神であり、いつの時にも、わたくしどもの指針となり光明となっ
てかがやいています。